

かくひと

書人

大学卒業後に腰掛けのつもりで入った会社がポリシヨイ・サーカス興行の営業をしていた。熊の飼育係の仕事から始めた青年は、巡業が終わるころにはすっかりサーカスの魅力にとりつかれ、以来三十余年、サーカスの興行師として世界各地を飛び歩いてきた。

本書は、今まで関わってきたサーカス興行の思い出、出会ったさまざまな芸人たちの逸話などをつづった回想録だ。

「ハラハラする出し物や芸人を探すてんやわんやの旅の思い出ばかりですが、いつの間にか自分もツイルカッチ(サーカス野郎)になっていた」

国境、波乱を越える芸

『サーカスは私の〈大学〉だった』

プロデューサー・文筆家

大島 幹雄さん (60)



「今は規制が厳しくなり、町の広場というわけにはいきませんが、それでもサーカスは世界的な市場と広がりをもった大衆芸能です。動物や土の臭いのする舞台で道化が跳びはね、アクロバティックな空中芸を家族で楽しむことは変わりません。またサーカスの人間たちは自分の劇団にどんな人種や民族の芸人がいるかが気にしない。浮草生活の放浪人であると同時にコスモポリタン。国境と時代を越えて移動し続ける自由な気風と活力が彼らの魅力です」

本書のもう一つの持ち味は、そんな海と国境を越え、革命や戦争のなかで活動したサーカス芸人たちの記録が随所に描かれることだ。ロシアアバングナルドとして活躍した道化師ラザレンコ、ロシア革命や戦火のヨーロッパを絶品の足芸を披露しながら旅した沢田豊……。それら波乱の芸人たちの事跡を調べながら、東洋を含めたサーカスの世界史や文化を体系化する「サーカス学」が大島さんの積年の目論みだ。

「まずは海を渡った日本人のサーカス芸人たちの足跡をまとめたい。歴史に翻弄されながらも、彼らの血脈と芸を継いだ芸人がどこにいても異国で」

本職のサーカス興行の方は、十六日から愛知県犬山市のリトルワールドで「オリエンタル・イリュージョン・サーカス」の催しが始まった。

こぶし書房・一八九〇円。(大日方公男)

後、東北ではよく見かけますが、写った

季節を彩る野花を撮

地を歩き

